【研究ノート】

アソシエーションルール制定以前に存在したバドミントンのローカルルールに関する研究

蘭　　和　真
東海学院大学健康福祉学部総合福祉学科

要　約

バドミントンの起源はバトルドーアンドシャトルコックと呼ばれる英国に古くから伝わる羽根突き遊びであると考えられている。すなわち、この遊びが進化、ゲーム化し近代スポーツとしてのバドミントンになったのである。その進化の過程では多くのローカルルールが考案された。そこで、本研究ではこのローカルルールを検討することによってバドミントンが近代スポーツ化する直前の様子を探ろうとした。1874年頃に文書化したルールが誕生し、同時にこの頃にバドミントンという名称が定着したものと考えられる。1893年にバドミントン協会が設立され、それまで多く存在したローカルルールがアソシエーションルールとして統一されたが、それまでのルールには多くのバリエーションが見られた。当時はプレーする場所のことをグラウンドと呼ぶ場合が多かった。これは屋外でのプレーが一般的であったことを意味する。また、芝の上で行うことも一般的で、これはこの頃考案されたローン・テニスの影響と考えられた。さらに、コートの形状やネットの設営法についても今とは全く違うものが見られた。コートの寸法、プレーヤーの数についても大きく異なり、まさにこの時期に試行錯誤を繰り返しながら最もこのゲームに適したルール作りが行われていたものと推測された。この繰り返しにより近代スポーツバドミントンが成立したものと推測された。1893年にバドミントン協会が設立され統一ルールとしてのアソシエーションルールが制定された。ただしこのときに採用されたコートの形状については今回研究対象とした資料の中には見られず、極めて特異な形状であると考えられた。どのような理由および経緯でこのような形状のコートがアソシエーションルールに採用されたかは全く不明で今後の研究に期待が寄せられるところである。

キーワード：バドミントン，ローカルルール，アソシエーションルール ,19世紀後半

1．はじめに

バドミントンの起源はバトルドーアンドシャトルコックと呼ばれる英国に古くから伝わる羽根突き遊びである[1]。これは日本に見られる追い羽根突きによく似たものであるが、元々は木ぎれで木の実に鳥の羽をさしたものを打ち合っていた。ところが、英国版羽根突き遊びでは打具が進化していった。すなわち、木ぎれからフレームに子羊の皮を張ったラケットに進化していった[2]。そして単なる羽根突き遊びからゲームへと進化していった。

この遊びは、19世紀中頃、英国グラスタシャー州にある第8代ボーフォート公爵家のカントリーハウスであったバドミントンハウスのボールルームで公爵の娘達やその友人らによって行われていた。最初は一人で打って楽しんでいたのであろう。それが次第にゲーム化していったようである。すなわち、二人で打ち合って何回続くかというゲームに進化していった。事実、現在のバドミントンハウスには当時の様子を想像させるバドルドーが残されている。そのバドルドーには、ヘンリ・サマーセット譲が友人のベス・ミッチェルと1845年2月に2018回打ち続けたと記してある[3]。このことからも、この遊びがこのときに打ち合う回数を競うゲームに進化していったことが想像される。しかしながら、数を競うゲームもプレーヤーの上達に従って果てしなく続くゲームに変化すると興味も半減する。前出のヘンリ・サマーセット譲と友人のベス・ミッチェルのラリーでは2018回続いたときろくされているが、1回につき1秒かかったとしても30分以上続けているわけでこれではおもしろくなくなってしまう。そこで、このゲームに新たな進展が起こったのであろう。すなわち、数を競うのではなく2人でラリーを続けてどちらが先に失敗するかを競うという発想である。ただし、二人が向かい合って何も無い状態でラリーを続けても果てしなくラリーが続くだけとなる。そこで、2人の間に障害物を設置し失敗しやすくした。その障害物は今で言うところのネットで、初期の頃には洗濯用のロープが利用され部屋の壁を利用し2人の間に張られた[4]。その他、この新たなゲームをおもしろさをもって成立させるためのルールが次々に考案されていった。例えばコートや得点法などである。

このバドミントンハウスで考案された新しいゲームは人々に知られることになっていった。そこで、この地を

離れ、色々なところで色々なルールが作られていったようである。いわゆるローカルルールと呼ばれるものである。このゲームも他の近代スポーツと同様に数多く作られたローカルルールが統一され近代スポーツとして成立する運命をたどることになる。統一ルール、すなわち、アソシエーションルールが制定されたのは1893年のことであった。ルールを統一するための目的で設立されたバドミントン協会によっての制定であった[5]。そこでここで制定されたルールこそが現在のバドミントンルールの原型となっている。

上述のように進化・発展し近代スポーツの一つとなったバドミントンであるが、1893年が大きなターニングポイントとなった。すなわち、アソシエーションルールの制定である。そこで、本研究ではこの1893年のアソシエーションルールの制定以前に存在したローカルルールに注目し、近代スポーツ化する直前のバドミントンの状況を明らかにすることを目的とした。

2．ローカルルールの文書化について

1899年12月に発行されたLawn tennis and BadmintonのThe Early History of the Gameという記事[6]によると、歴史的なルールがセルビー大佐によって作られ、1873-74年にプーナ駐屯地の体操場から出版されたとある。この記事を信頼するならば1873-74年には文書化されたバドミントンのローカルルールが存在したことになる。また、同記事ではその冊子のタイトルページには、さあ、法律と権威ですよ、ご婦人方、というシェクスピアの一説がユーモアたっぷりに引用されていたという。つまりこれはそれ以前には文書化されたルールが存在しなかったことからルールを巡って揉め事が絶えなかったことを示唆しているのである。そこでセルビー大佐が揉め事が起こらないように文書化したルールを作ったのだという。このセルビー大佐が文書化したというルールについて、現在のところその存在は明らかにされていない。ただし、同誌4月号[7]の記事によると、セルビールールのコートは40フィート6インチ×20フィートで中央部のネットの高さは5フィートであったとされている。1893年に制定されたオフィシャルバドミントンルールのコートは、44フィート×20フィートで中央部のネットの高さは5フィートであった。両者を比較するとセルビールールのサイドラインがオフィシャルルールに比べて2フィート6インチ（76.2㎝）短いだけでネットの高さとバックバウンダリーラインの長さは全く同じである。したがって、このセルビールールがオフィシャルルールの原型となったと考えてもおかしくはないであろう。また、この記事にはセルビールールの下にゲームを行った場合の戦術についても詳しい記述がある。上述のことから、1873-74年頃にかけてバドミントンが文書化されたルールを伴ってプレーされるようになり、次第に単なる遊びから競技化し、さらには近代スポーツへの道を進み始めたと考えるのが自然であろう。

3．1874年に出版された雑誌に見られるバドミントンプレーの様子

1874年4月25日に発行されたThe Graphicの392頁に発表された絵が図1[8]である。

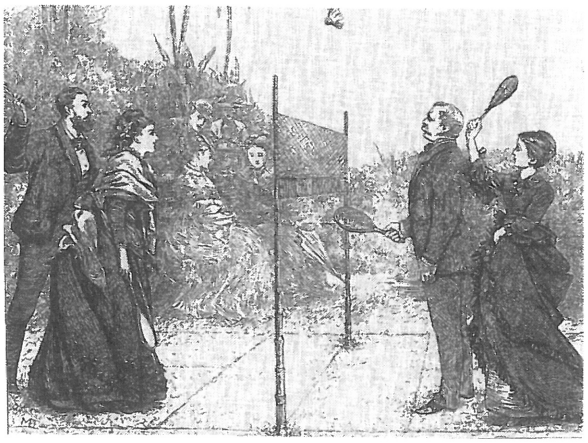

図1　THE NEW GAME OF BADMINTON IN INDIA

この絵の次頁の記事[9]では、最近、インドでこのバドミントンが流行してきて、クロッケーより人気が出てきたとある。また、そのゲームの方法についても簡単ではあるがルールと思われるものも含めて30行程度ではあるが記述している。コートの寸法についての記述はないが、高さについては5フィート、あるいは、それ以上の高さと記されているのでセルビールールと一致する。これをもって、セルビールールの存在について言及することはできないが、インドでのプレー風景であることと1874年の記事であることを考えるとセルビールールの下に行われている可能性も否定できない。

ここで注目されることが一つある。それはこの絵のタイトルである。THE NEW GAME OF BADMINTON IN INDIAとあるが、このゲームのことをバドミントンと紹介している。これは画期的なことと考えられる。これ以前にはバドミントンという名称をともなう文書を見つけることはほとんどできない。唯一、Bernard Adams[10]によると、1860年にロンドンの玩具商であったIssac Spratt がバドミントンバトルドーという新しいゲームを手引き書と共に提案したというが、この存在についての具体的なことについては明らかでなく、ただし、

羽根突き遊びから近代スポーツへの橋渡しをした可能性はある。しかしながら、その後バドミントンという名称については定着することはなかったようである。しかし、これ以降、すなわち図１の絵が雑誌で公開されて以降は、バドミントンという名称が多くの出版物に出てくるようになった。百科事典のブリタニカにも 1875 年には項目としてバドミントンが取り上げられている[10]。1874 年の雑誌掲載の絵およびブリタニカに項目として加えられたことをもってバドミントンという名称が市民権を得たと考えて良かろう。

４．初期のローカルルールからみた当時のバドミントンの様子

著者の手元には 1874 年から 1883 年の間に文書化されたバドミントンのルールに触れられている資料が 11 点ある[11,13,13,14,15,16,17,18,19,20,21]。中には簡単な手引き書と思われるものもあるが、中にはかなりしっかりした条文に整えられているものもある。ここではこれらのルールを概観しながら当時のゲームの様子を推測する。

まずはコートであるがグラウンドという表現が見られるものが多い[11,12,13,14,15,16,17,18,20,21]。これらのことから、当時のバドミントンは屋外で行われるのが一般的であったと推測される。実際にプレーの様子をイラストで示しているものも以下の図２[17]、図３[21] のようにあるが、明らかに屋外で行われている様子がうかがえる。

また、この屋外のグラウンド設営の方法について詳しく解説をしているものもある。Henry jones[12] は白色顔料に水を加えてラインを書くと良い、と提案しているが、現在のグラウンドにラインを引く方法と類似していると推測される。芝の上でのプレーを推奨、あるいは前提にしているものもみられる[14,15,21]。これらの様子から、この当時は試行錯誤しながらバドミントンに合ったプレー環境を模索していたことが推測される。

コートの寸法についてはまだ定まったものがなく、使える土地の広さやプレーヤーの力量、参加者の数によって決めるとするものが多い[12,13,15,17,18]。まさにローカルルールと呼ぶにふさわしい状況で合ったことが推察される。コートの形状についても様々なバリエーションが見られる。図４のような砂時計型のコートを提案しているもの[13,14] もある。

このコートは 1874 年に Walter Wingfield が考案した Lawn Tennis の影響であると考えられ、そのことからバドミントンにおいてもの芝の上でのプレーを推奨す

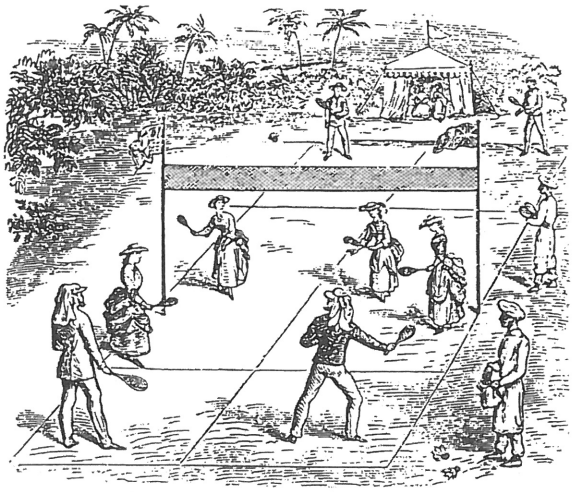

図２　プレーの様子

BADMINTON—THE GROUND, THE NET, AND THE PLAYERS.

図３　プレーの様子

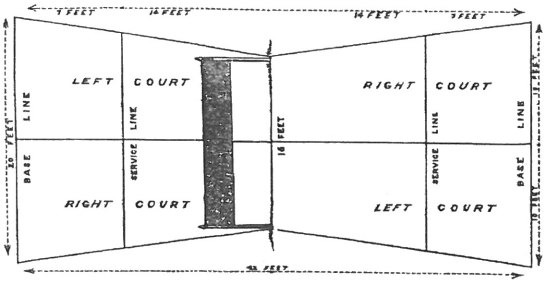

図４　砂時計型コート

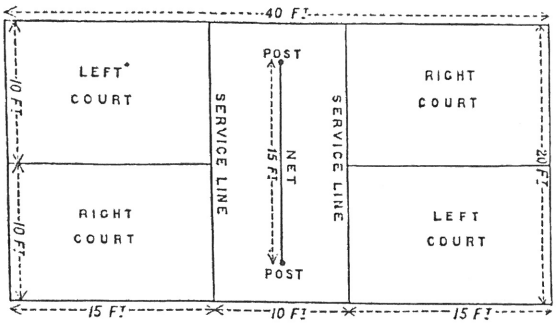

Diagram illustrating the Game of Badminton.

図５　中にポストを立てて設営するコート

ることが多かったものと考えられた。しかしながら、長方形のコートを強く推奨するものもある[15]。コートの形状についてはこの当時、プレーをする中でテニスの影響も受けながら色々と模索されていたことが推測される。他方、ネットについては図５のようにコートの中にポストを立てて設営するするものもある[19,21]。

この方法にどのような意味があるのかはわからないが、当時、珍しくなかった方法であると推測される。なお、ネットについては初期の頃はロープが使われていたという記述がある[21]。しかしながら、シャトルがロープの上を通ったか下を通ったかの判断がしにくかったそうでネットが一般的になったとある。これについては、上述、１．はじめに、において、バドミントンハウスでの出来事で、２人で打ち合いどっちが先に失敗するかを競うために洗濯用のロープが使われていたと記述したが、それと一致することで非常に興味深い点である。

プレーヤーの数については多くの資料で触れられている。２人～８人まででプレーできるが、２人か４人で行うのが最良であるとし、シングルスとダブルスを推奨するもの[12]とプレーヤーの数を２人または４人と限定しているもの[18]が現在のバドミントンに最も近い。しかし、２人でも４人でも６人でも８人でもプレーすることができるとし、現在のシングルスとダブルスを掲げながらも３対３と４対４のバリエーションも提案しているもの[11,13]もある。また、４対４を一般的としているもの[15]、２対２を推奨しているもの[21]も見られる。プレーヤーの数についてもコートの形や寸法と同様にまさにローカルルールと呼ぶにふさわしいこの当時の様子が読み取れる。

他方、今回検討した資料の中にはルールに関することではないが、「バドミントンが最初にプレーされたのはインドで、1874年の夏にボーフォート公爵によってイングランドに導入された、と私は信じている」との記述があった[21]。これは極めて初期のバドミントンの歴史に関わることで、これが何を意味するのかについては今後の研究が期待されるところである。

５．アソシエーションルール

上述のようにバドミントンが近代スポーツの道への進む過程の中で多くのローカルルールが存在したことは明かである。そのため、色々なローカルルールの下に結成され活動していたクラブ間の対抗戦が行えなかったという[23]。そこで、ルールを統一するために協会を設立し1893年にアソシエーションルールを制定したと考えられている[24]。

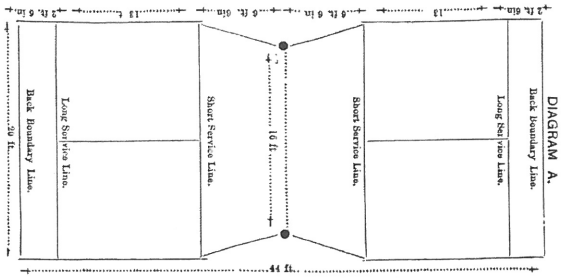

図６　アソシエーションルールのコート

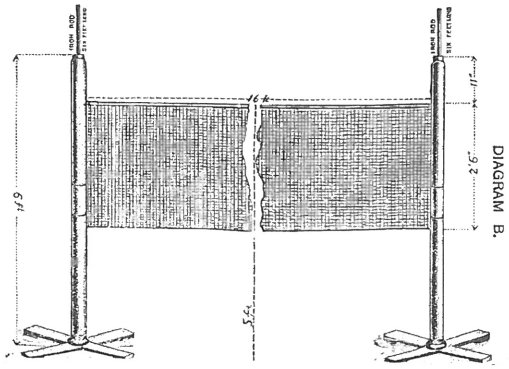

図７　アソシエーションルールのネット・ポスト

蘭[24]は1893年に制定されたルールについては存在が明らかになっていないとしながらも、1898年版についてはそのルールについて詳しく触れている。これによるとそのコートおよびネット・ポストは図６、図７のとおりである。

今回、アソシエーションルールが制定される以前のローカルルールについて詳しく見てきたが、当時のバドミントンのプレー状況を推察するためにコート、ネット、ポストだけを比較しても同様のものはなかった。初期のアソシエーションルールについては、コート、ネット、ポストだけを取り上げても現在のものとは全く異なるものであるだけでなくそれ以前に存在したローカルルールと比較しても全く異質のものであったということは非常に興味深いことである。今後、アソシエーションルールがこのようなルールになった経緯等について研究が進むことが期待されるところである。

註および引用文献

1 Bernard Adams, The Badminton Story, BBC, p.17, 1980.
2 Pat Davis, The Encyclopaedia of Badminton, Robert Hale Limited, p.17, 1987
3 Bernard Adams, 前掲書, p.19
4 Bernard Adams, 前掲書, p.23
5 蘭和真, 蘭朝子, 初期のバドミントンのローカルルールに関する研究, 東海女子大学紀要, 第15号, p15-36, 1996.
6 The Early History of the Game, Lawn Tennis and Badminton, Dec. 6, p.439, 1900.
7 The Theory of Badminton, Lawn Tennis and Badminton, Apr. 4, p.500, 1900.
8 The Game of Badminton in India, The Graphic, Vol.6, No.230, p.283, 1874.
9 Ibit, p284.
10 Bernard Adams, 前掲書, p.22
11 Ibit, p284.
12 Henry Jones, Badminton, The Encyclopaedia Britanica, 9thed. , Vol.3, p.228, 1875.
13 Cavendish, The Game of Lawn Tennis and Badminton, Thos. De. La Rue, p.25-29, 1876.
14 Rules for New Game of Lawn Tennis and Badminton, J. Buchanan, p.18-23, 1876.
15 Rules and Directions for Playing the Popular games Lawn Tennis and Badminton, Jaques & Son, p.9-13, 1876.
16 The Earliest Days of Badminton, The Badminton Gazette, Fed. , p.1930.
17 Julian Marshall, Lawn Tennis and Badminton, Jefferies & CO. , p.56-59, 1878.
18 Lawn Tennis and Badminton, J.G.Cayless 6 Sons, p.27-39, 1879.
19 J.Keith Angus, The Sportsman's Yearbook, Cassel, Petter, Galpin &Co. , 193, 1800.
20 Lawn Tennis and Badminton, p. 27-30, 1881.
21 Lawn Tennis, Badminton, Croquet, Troco, Fives, etc. , etc. , etc. , Ward, Lock, Sons, p. 30-39, 1883.
22 Walter Wingfield, The Game of Sphairistike or Lawn Tennis, Harrison, 1874.
23 Its Origin and Aim, Lawn Tennis and Badminton, Feb. 7, p470, 1900.
24 蘭和真, 初期のオフィシャルバドミントンルールの研究, 東海女子大学紀要, 第24号, p15-31, 1996.